
幸か不幸か

水都森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸か不幸か

【Nコード】

N3917M

【作者名】

水都森

【あらすじ】

空から人間が落ちてきた。

背の高いビルしか並んでないような都会で。

降ってきたその人間は、“運よく”軌道がそれたのか、街路樹がクッションとなった上で植え込みに落ち、膝を擦りむいただけだった。

運悪く、幸運な自殺願望者に出会ってしまった女の子のお話。

Lucky? 出遭い

つまらない。

「でさ、ヒロったらまだサチのこと好きなんだよ!」

「えー! ありえない! あんな事されても?!」

「物好きだねえ・・・」

「サチもサチならヒロもヒロだよ」

「どMだね」

くだらない。

「でもさ、2組の飯田! 彼女作ったらしいよ」

「え? 誰々?」

「うーん……一言で説明すると、眼鏡でデブで地味ーな奴」

全ての授業が終わり、学生を縛り付けるという責務を果たし終えた教室で、やっと勉強から開放された女子生徒達が椅子に座り込んで、二つくつつけた机を囲み、談笑していた。

開け放された窓から生温い風が流れ込み、さらに気だるさを誘っている。

「あー、分かった、あのキモイのでしょ」

「げえー! あんなのと付き合ってるの?! 信じらんないんだけど!」

ある者は、わはは、と大げさに笑いながら。ある者は面倒そうに相槌をうち、ある者は瞳を輝かせながら情報に食いつく。それでも皆、会話を楽しんでいた。一人を除いては。

「私なら死んだほうがマシー!」

「で、飯田と付き合ってたのって誰??」

「3組の……鈴原……何とか。下の名前は忘れた」

「あ!あのぶりっ子かあ」

「じゃあ、お似合いなんじゃん?」

「飽きた」

それまで彼女達の会話は緩慢に、ゆっくりと流れていた。しかしその一言は、流れを堰き止め、押しやった。今までのどれとも性質が違った一言により、場は一瞬にして凍りつく。

「……は?」

「いきなりどうしたの?」

「帰る」

「え、ちょ、急に何それ」

「ちょっと?!」

慌てふためく女子学生たち。それを見もせずに、飽きた(……)彼女は、帰り支度をさっさと済ませると、立ち上がり様にバックの紐をつかんで、後ろも振り返らずにそのまま教室を後にする。長い黒髪が、呆氣にとられる少女達の前をさっと横切り、消えた。

後に残された女生徒達は、突然受けた仕打ちのショックから、気まずく押し黙る。そのうち一人が口を開いた。

「意味分かんない……」

「あんな子だと思ってなかったのに」

「どうしたんだろう?……なんかあったのかな?」

「いいよ、あんなKY!ほっときなよ!あーあ、気分悪い。」

戸惑うものの、心配するもの、憤るもの。しかし結局、ハプニング(……)に対する感想をひとしきり述べた後は、彼女らの興味はまた元の源流に戻るのだ。

そんな光景を思い浮かべながら、朝木^{あさぎ} 希羅^{きら}は廊下を歩いていた。少し雑に切り上げすぎたかと後悔はしているものの、きっと彼女たちは、思い掛けなく受けた粗い扱いに対するイライラを発散させたら、すぐにまた”恋バナ”に花を咲かせ始めるのだ。

——何処其処の誰が、別れた。付き合った。喧嘩した。そして仲直り。

テスト勉強面倒くさい。嫌だ。したくない、結局しなかった。社会の先生がむかつく。生徒指導係がうざい。校長の話は長い。

その繰り返し。永遠に続く、エンドレス。

よくもまあ、飽きないものだ。希羅は逆に、彼女らに対して感嘆を覚える。自分の知らない噂話の存在を許さない。許せない。既知の事実を共有するだけの会話で、彼女達は幸せそうに、楽しそうに話すことが出来る。皆が知っている情報の、どこに価値があるのか、希羅には理解できなかった。

友達も飽きた。学校も飽きた。みんな、同じ反応しか示さない。同じ反応で満足する。それが、つまらない。

靴箱に並ぶ靴。学校指定の上靴は、持ち主の性格によって擦れたり、記名してあったりはするが、基本的に、というかほとんど全て同じだ。ずらりと並ぶ箱に、希羅は今まで履いていたものも押し込む。

「また家で引きこもろうかなあ……？」

希羅は一年前まで立派な引き籠もりであった。だが、家に籠もりきりで考えに耽るのも飽きて、インターネットでの交流を始める。チャットやら掲示板やら。インターネットという全世界共通のツ―

ルには、流石に変人も多くて、それなりに楽しめたのだけど、結局飽き、また外に出てきたのだった。

だが、やはり本質は変わらないらしい。

「やっぱり飽きちゃった」

飽き性、だと、自分では思っている。

……それか、ズレている、のか。

周りから浮いている、変人。社会に適応できない。不適合者。考えた、気づいたことはたくさんあるが、見ないようにしてきた。

「価値観が違うのよね、きっと。」

そうして自分を納得させる。切り揃えた前髪は伸び出していて、俯くと少し鬱陶しかった。

都会の空気を少しでも清浄にしてほしいと植えられた街路樹に、日が落ちている。夕陽に染まる木の葉は、透けているようで、光っているようで、とてもキレイだった。

「……キレイだな」

風が吹く。突風に、腰まで伸ばした希羅の黒髪が艶やかになびく。希羅は髪を抑え、空を見た。夕焼けは、自分を見上げた希羅の瞳に入り込んで瞬いた。茶の混ざった黒い瞳が、眩しそうに半分閉じられる。

希羅の半分になった視界の中に、それは落ちてきた。一体何が落下してきたのかという情報が脳に伝わる前に、それは植え込みの中に消える。

一瞬の沈黙。衝撃を受けた人間の耳からは、音が消えるらしい。その刹那、希羅の世界はいわゆる無音状態だった。

「いったあ……」そして、こんもりと生えたツツジの茂みの下から聞こえるのは、間違いなくヒトの声。

希羅は反射的に空を見上げる。

ここは都会。しかもオフィス街。20階立てでも低いくらい、高層ビルが立ち並ぶ通りである。

「……はあ、また生きてるし。」

植え込みの中から、ため息と共にそれが起き上がる。よっころしよ、などと呟きながらフラフラ立ったその頭からは、枝が生えていた。

Unlucky? 集られ

彼の肩まで伸びた髪は夕陽に照らされ、キラキラと輝いていた。栗色の大きい目、すっと通った鼻筋に、ピンク色の唇。その整った顔立ちには、カッコいいというより、希羅も思わず見とれてしまう程、女性的な美しさを持っていた。だが、なぜか希羅はその人が“彼”、なのだと分かった。

長い睫毛も金色で、彼の金髪は地毛なのだろうと確信させられる。背丈は160cm程だろうか。のっぴな希羅よりも少しだけ小さい。ジーンズに、水色と白の縞模様のTシャツを着ている。透き通るとまではいなくても、十分に白いその肌は、街路樹の枝や植木にやられたのか、所々赤く擦れていた。

「……あの」

「ん？」

「刺さってます」

自分でも知らないまま、勝手に口が動いていた。

「頭に」

空から落ちてきた人に教えてあげた。髪の毛に枝が絡まっていることを。

指摘され、彼は豊かな金髪をもしゃもしゃと掻き回す。手がカルしている髪を掻く度に、金色が煌めく。

「うわ、ほんとだ、刺さってんね」

ようやく発見された枝は、あっさり除去された。

「ありがとう」

自然な会話。流暢な受け答え。穏やかに微笑む彼の顔からは、非日常などなにも感じられない。

「い、いいえ……」

ただ、さっきの登場シーンの違和感は全く無視されていた。

「そ、それじゃあ、また」

触らぬ神に祟りなし。それならばと、希羅は流れにのってそくさと帰ろうとする。

しばらくは彼について想像することで退屈を紛らわせるかもしれない。希羅が期待するのはその程度だ。飽きっぽく、人と好み合わない希羅ですら、空から落ちてきた人と交流を持ちたいと思うほど、一般人のコースを外れてはいない。

「あ、ね、待って」

だが、彼の横を通り過ぎようとした時、希羅は止まるしかなかった。

自分の腕をしっかりと掴む手。その手を辿ると、栗色の瞳がじつと希羅を見つめていた。

「あ、の：なんですか？」

恐る恐る尋ねると、彼は子犬張りのまん丸く潤んだ目で希羅を見つめ、

「お腹、空いた…」

「：はあ」

間の抜けた返事も介さず、彼はちょっと俯いた。するとキラキラしていた瞳に影が出来、哀しげに陰る。希羅の胸は締め付けられた。

「でも：お金、ないんだ」

腕がぎゅっと握り締められる。

「お願い：：：ご飯食べさせて」

涙の溜まった栗色の瞳が切々と訴えかけてきていた。

断ったら人間じゃない。空から降って来て落ちて、でも生きてるこの人が例え人間じゃなくても、これを見捨てたら私が人外になっ
てしまう！

：しかし一転、彼の天使のようににはにかんだ顔を見ながら、希羅はどんな貢がせ家の女の子でもこんなに完璧に甘えられないのではないかと、とんでもない悪女に引っ掛かったような気もしていたのだった。

「ファミレス、ファミレス」とはしゃぐ彼の顔には勿論、完璧なエクボがきっかり二つ並んでいた。

「よく食べますね…」

脳内での、持ち合わせている全財産の計算結果に、少し危機感を覚えて希羅は口を開いた。

「うん、美味しいね！」

彼は口いっぱいのスパゲッティを咀嚼しながら笑顔で頷く。

「：もうお腹いっぱいになりましたか？」

「僕、ファミレス大好きなんだ」

希羅は噛み合わない会話にため息をついた。店に着くまで、着いてからもこの数十分間、ずっとこの調子だった。

「：…あの、そろそろお名前だけでも教えてもらっていい？」

「僕の名前？」

彼はきょとんと目を丸くして手を止めた。

「そう：一応、ご飯奢ってる訳だし」

希羅は遠慮がちに彼の唇の数センチ前で止まっているフォークを指差す。

「そっかそっか、気づかなくてごめんね！じゃあちょっと待って！」

彼は一旦フォークを皿に置き、水を一口飲んで、紙ナプキンで口を拭うと、両手をきちんと膝の上に乗せた。

「自己紹介はきちんとしないとね」

彼は、これだってちゃんと教育は受けてます、と言いつつニコリ

と笑いかけて来た。希羅は反射的に、ろくな教育じゃないだろうなと言いたくなる衝動を抑えた。

「僕の名前は前田 コウ。幸せって書いてコウって読むの。」

「コウ？」

「でも、僕あんまり好きじゃないんだこの名前。」

「…どうして？」

「幸せすぎるんだ、僕。」

希羅はやっぱりこの子は相当に甘やかされて来たか、変人に育て上げられたのかのどちらかなのだろうという確信を持った。

「僕、生まれてから不幸せ、不運に出会った事がないの。」

「…ずーっと幸運に恵まれてたの？」

「そう！」

「え…でも、でもさ」

触れてはいけないのかな、とは思っていた話題。しかしあまりにさっきの行動と話す内に見えてくる性格がちぐはぐで、希羅は思わず聞いてしまった。

「さっき、君、ビルから飛び降りなかったっけ…？」

「うん」

予想通りというか、あっけらかんと返事する前田幸。

「…幸せなのに、なぜ死のうとしたの？」

「幸せだから」

希羅にはこの不思議な男の子の気持ちや意志が全く見えなかった。単純そうで、頭も弱そうで、見切れそう。

「…だから？」

「だって、人間の一生には、幸せと不幸せ、どっちも同じだけあるって言うじゃん？こんなに幸運続きなら、僕どれだけ後で不運に出くわすんだろうって、怖くなるの」

なのに、でも型にはまって今まで付き合ってきた人間とは違う、絶対的に違う。単に思考が間違ってるだけかもしれないが。

「…なるほど」

「だから死のうとするんだけど…毎回運がよくて死ねないの」

「はあ…」

希羅は悪循環、という言葉在即座にイメージした。

「うああ！」いきなりコウがテーブルに突っ伏した。

「ど、どうしたの？」

うつ伏せのままコウは話し出す。

「僕、不幸が怖くて死のうとして、でも死ねないから幸運を無駄に使ってるんだよね」

「…そ、そうですね」

「僕、こんなことしてると一気にいっぱい不幸来るのかなあ」

「どうだろう…」なんとも言えずに希羅は曖昧に答える。

「あああ！」また叫んでコウは顔だけ持ち上げた。その瞳にはお約束のように涙が溜まっている。

「僕、辛くて痛くて苦しい死に方で全部の代償払うのかなあ」

「そ、そんなことないよ…きっといい死に方…というか、不幸なんて来ないよ」

「…そう？」

「う、うん」

「ほんとに？」

「ほんとだよ」

…だってキミが不幸せになったら、誰かしらが絶対助けてくれるよ、神様だってキミに惚れてるんじゃないの？とは希羅には言えなかった。

「じゃあさ、あ！…キミの名前は？」

「…希羅。朝木、希羅」

「キラ！いい名前！キレイだね」

思い出したようにコウが尋ねられ、希羅は若干不満だったが、純

粹に感動され満更でもなかった。希羅が少し悦に浸っていると、コウはいいこと思いついた！とでも言うように、瞳をきらりと光らせた。

「…じゃあキラ！僕と一緒にアイス食べよう！」

「え？！どうやったらそうなるの？！」

「だって僕アイス好きだもん」

「だからなんでそれが…」

「それから、キラも好きだから！」

希羅の心臓が飛び上がった。そして、頭の中から、目の前の純粋な瞳以外のことは飛んでいってしまった。退屈な日常や、学校の憂鬱、自分への諦め、財政ピンチも、全て。

「だから、好きな人と好きな物食べたいの」

コウの瞳は、これ以上いい考えはないだろうという自信や確信で輝いていた。

目の前で美味しそうにチョコレートアイスを頬張るコウを見ながら、希羅は、何かとても厄介なものを知り合ってしまったような気がしていた。

Lucky? 振り回し

「ふあゝっ！よく食べた食べた」

「：ほんとにね」

満面の笑みで伸びをするコウその人の後ろで、全財産を食い尽くされた希羅は一人ごちた。

「キラ、いい人だね」

もうすっかり辺りは暗く、街灯の光が落ちる遊歩道を軽やかにスキップしながら、くると軽やかに後ろを振り返り、コウが笑いかける。

「そう？」

バカなだけなんだと思うよ、と心の中で呟く。

「絶対にいい人だよ！」

「：なんでそう言い切るの」

「僕ね、生まれつき運がいいから、ヤな人にあつたことないんだよ」それは出会った人がコウの氣に中てられて思わずいいことをしてしまうこと、コウがあまりに他人を純粋に信じきっていて人間皆が持っている邪悪な心に気づいていないこと、どちらも上手い具合に作用してるのだろうな、と希羅は思う。

「なるほどね」

「あ、ね！星、星だよ！」

「流れ星だよ！って叫ぶなら分かるけどね、星は毎日出てるんだよ」

「ん、でもね、今日は空が黒いからキレイだよ」

「：ほんとだね」

空を見上げると、林に囲まれた黒い空の中で、大小の星星が瞬いていた。端には薄青い雲が風に弛んでいる。

「コウは星が好きなの？」

上を見つめたまま話した。

「うん、キレイだから好き」

「そ…なんだ」

コウも顔は空に向いているんだろうな、と推測ながら相槌を打つ。

「ね、キラも好き？」

「…うん…形とか、色とか、輝きとか、バラバラだし…全部違うから、退屈しないから、好き。」

コウの理由と比べ、捻くれ加減に自嘲した。

「ふふ、キラって面白いね！」

キミに言われたくないよ、と希羅は心の中で返す。

「コウのが百倍面白いから」

「え！なんで！」

素っ頓狂な声を上げるコウ。そこまで驚かなくてもいいんじゃないの、と思いつながら頭を戻すと、血が偏っていたのか、少しくらくら目眩がした。

瞬きをしていると、段々焦点が合ってきた。まだ残る気持ち悪さに感じて、変なこと、言ってもいいか、と半ば自棄になって目の前のコウを見つめる。

「だって、キミ…コウは人間なの？」

「へ？」

「私、天使かと思った」

「どうして？」

「20階立てのビルから落ちて無傷だった人間を私は知らない」

…それに、ここまで純粹で単純そうなのに、全く読めない人間も、私は知らない。

コウはしばらくうーん…と難しそうに眉を寄せて考え込むと、ぽんと手を打って希羅に答えた。

「僕は人間だよ。だって、母さんのお腹からちゃんと生まれたよ」

その動作が、なんだか嘘っぽくて、演技みたいで、

「…信じられない」

「えー…じゃあどうしたらキラは信じる？」

「分かんない」

勝手なのは、分かっていた。高校生にもなって、『貴方は人間なの？』なんてバカみたいな質問をし、その上証拠まで求める。聞いたくせして、相手に丸投げ。普通の会話ですら、大抵の人間は困惑するだろう、可愛げのないそんな返事。

「そっかあ…じゃあ、しょうがないね」
でも、

「…え？」

彼は間を空けたりもせずに、

「だって、僕バカだから」

戸惑う様子もなく、

「キラに信じてもらう方法、僕わかんないから」
予想通りというか、

「僕のこと、天使って思ってた全然平気」

普通の人なら言わないだろう台詞を、

「僕、天使ってことにしといて」

普通に口にした。

「…はあ」

何か、面白い。この人、コウは、変人だ。それは久しぶりに感じる、楽しさだった。

が、そう思ったのが間違いだった。

「ふふ、僕天使かあ…空、飛べたらいいよね」

「…うん」

「でも僕ね、とべるんだよ」

「へ？」

「ほら、キラ、見て！」

コウは側転、バク転、宙返りと立て続けに跳んだ。

「す、すごいねえ…」

「へへ、でしょ」

コウは調子付いたのか、飛ぶのを止めなかった。それどころか、楽しそうに笑いながらくるりくるりと回る、飛ぶ、跳ねる。

「あの、えーっと、コウ？」

時刻は7時。部活帰りの学生や帰宅途中のサラリーマン、買い物袋を提げた主婦など、まばらではあるが多少通行人のある遊歩道。幅は広く、被害は受けないだろうが、高校生くらいの男の子が笑いながら外で跳ね回っていたら、奇異の目で見られるのは当たり前である。変わっている部類だとはいえ、希羅は一般人なのだ。視線が恥ずかしい。

「コウ！危ないから止めなよ！」

危ない。怪我が危ない。行動が危ない。二通りの忠告の意味にも気づかず、コウは大丈夫！とけらけら笑いながら跳び続けた。

ひとしきり跳ね回った後、コウは肩で息をしながらベンチに避難していた希羅の元に帰ってきた。

「ただいま！」

「…おかえり」

ふう、と一仕事終えたかのように吐息を吐き、当然のように隣に腰掛けるコウ。

「そんなに疲れるなら、なんでずっと跳んでたの？」

「べつに意味はないよ。したかったから、しただけだよ」

「…そう」

つまり、この子はバカなんだな。

「ねえ、キラ、僕ソーダ好きなんだ」

「は？」

「あのね、あのね…はしゃいじゃったら、のど渴いちゃった」

舌を少しだして、頭に軽く握った拳をあて、コウはてへつと照れたように笑った。

希羅はメロンソーダの缶を差し出しながら、コウにいいように使われてるなあと、現状を客観的に把握していた。

「ありがとう」

それでも、完璧なまでの可愛い笑顔に向けられると、思わず破顔してしまう。

小悪魔やら悪女やらに疎い希羅には、先程の一連の動作が計算して行われていたのか、全くの素でやっていたことなのかを判断することは出来なかった。

Un Lucky? 巻き添え

一人、ベンチに座る少女がいた。木陰に位置する此処でも暑いのだろうか、長い黒髪は横で一つに纏められている。切り揃えられた前髪は、照りつける太陽を見ないようにと俯く顔に影を作っていた。チェック柄の濃紺のスカートに、白いワイシャツ、そして赤いリボン。革靴も履いている。袖のまくられたシャツからは、色の白い肌が覗いていた。

朝木 希羅が身につけているのは、彼女の通学する高校の制服だった。今日は木曜日、列記とした平日である。彼女は、気が向いたから、学校をサボっていた。

「…暑い」

今は7月の中旬、いくら『都会に自然を』というコンセプトで作られた、木の鬱蒼と茂るこの公園でも、暑いものは暑いのだ。しかし彼女は、手近な店にも入ることが出来ないのである。原因は、三日前に出会ってしまった天使だ。

学校には、行きたくない。面倒だから。図書館も、学生姿で平日に二日続けて通うと、司書の視線が痛くなる。そうなると残るは適当に飲み物でも買って店で涼みたいのだが…生憎、希羅の財布の中には天使の追従を逃れた11円しか入っていないのだ。

「…飲みたい」

視界の隅に入ってくる自動販売機を横目で睨み、希羅は恨みを込めながら呟く。初めて出逢った性格に面白い体験をさせて貰ったとはいえ、割に合わない。

「気分のらないけど、バイトしようかなあ…」

コンビニの店員は飽きたから、次は何をしようか。新聞配達とか…1日で飽きそうだ。ファミレスの店員、とか? まあやってみて飽

きたらその時考えようかな。

茹だる様な暑さの中、希羅が何気なく公園を見回すと、

「…え」

ダンボールの上に立っている人がいた。鬱蒼と生えた林の中、一本の木から下がる縄に手をかけている。縄の先は丸くなっていて、その人は強度を確認するかのように二・三回縄を引っ張ると、頭をその中に差し入れていった。

「ちよつとちよつと！待って、早まるな！」

希羅は慌てて立ち上がると必死に遊歩道を走りぬけ、脇に植えてある植え込みを飛び越え、その人の下へ駆け寄る。その人は希羅の大声にびっくりしたのか、振り向こうとし、そして

「ぐえっ」

ダンボールを踏み外した。

「ああーっ！！」

希羅は遮二無二に突進し、その人の一瞬浮いた足を抱え込み、持ち上げる。

「ダメダメ！それじゃなんか私が殺したことになるっちゃうじゃん！」

「ふ、あ…」

上から漏れたため息を聞いて、何とか間に合ったのか、と希羅は安堵の息を吐いた。

火事場の馬鹿力。女子高校生で、特に運動もやっていない希羅が、人一人を抱えているのには、一瞬の気の緩みも大敵なのだ。と、言うわけで。

「ぐう…」

「あ！ごめんなさいっ！」

上の人の苦悶の声を聞き、希羅はまた抱えようとしたのだが、

——ミシッ：

「へ？」

——バキ…バキバキッ！

「あ、うああっ！」

天使の体重は意外と重かったらしい。これも幸運なのだろう、彼の重さに耐え切れず、木の幹は見事に折れた。そして、宙に浮いた彼、コウは落ちてきた。そう、下で彼を救おうと、必死に足を抱えんと頑張っていた希羅のところに。

Lucky? 恩返し

「…また、生きてる」

天使はため息を吐いた。と、その下で聞こえる呻き声。

「あ、キラ！また会ったね」

声を発した人物を確認すると、天使は輝くあふれんばかりの笑顔になった。

「あ、の…」

「ん？何？」

無邪気に首を傾げるコウに、希羅は嘆願した。

「…退いて下さい」

「キラごめんなさい！」

腹部、背中、頭、ぶつけた部分と乗られた部分を擦る。

「大丈夫？怪我した？痛い？」

そういうながら蹲る希羅を見つめる瞳は、今にも泣き出しそうだった。

「…いや、大丈夫だよ、気にしないで」

「ほんと？じゃあよかった」

こっちの遣った気も知らずに、すぐに満面の笑みに戻る純真爛漫な彼を希羅は若干恨んだ。

くそう、お前の目に負けただけで、ほんとはずっごい痛んだぞ。

20階から落ちても平気な様子を見て、勝手に構築されていた“軽そうなイメージ”だったが、ダメージは結構多大だった。

「う、うう…」

呻きながら立ち上がって、服についた土を払う。汗をかいていたせいでシャツには泥の染みとなっており、希羅は絶望的な気分になった。その間、コウは暢気にダンボールと縄を回収していた。

「それ、集めてどうすんの」

希羅の声に含まれていた咎める様な響きも気付いていないのだろう、自分の命を奪うところだった物を手に取りながら、コウは希羅の方も見ずに、普通に答える。

「え？また挑戦してみるの」

普通のことを話してる様に、普通じゃないことを。

「…また死ぬの？」

「うん、死ねないだろうけどね」

笑えないことを、笑って。コウは、言う。

退屈が嫌いな希羅も、人と同じが嫌いな希羅も、なぜか、素直に面白い、とは思えなかった。

「でもね、今日はキラに会いたかったんだ！」

重い話題を話していたのに、いきなりコウは弾んだ声を出す。いつの間にか、縄もダンボールもバック―（根元においてあったらしい）に収納されていた。

「…ほんとに展開無視するよね、毎度毎度」

「え？キラ？」

危ない危ない、思わず素が…

「なんでもない…何で？」

「この前のお返ししたかったから！」

久しぶりに見た天使の曇りのない笑顔に、希羅はこの上ない嫌な予感を感じていた。痛くないよ…ってドリル振る歯医者さんの微笑みみたい。隣で女の子、すごい声で泣いてるのに。キューーンって、聞くだけで痛いんだよね、アレ。

が、予想に反し、お返しはいたって普通だった。今日は僕がご馳走するよ、と言って希羅が連れてかれたのは喫茶店。大通りから外れた小路に位置していた其処は、茶を貴重とした落ち着いた内装をしている、4、5個のテーブルが並んだだけの小さな店だった。

その一画に陣取り、私、お金は今日はないよという希羅の念押しに「大丈夫だよ!」といまいち信用できない笑顔で答えたコウは、勝手にオーダーしてしまった。時刻は正午。そろそろ希羅の腹の虫も動き出していた。そんなこんなで、希羅の目の前には美味しそうな湯気のたったピラフが置かれていた。

「僕、これ大好きなの」

運ばれてくるなり、早速美味しそうに頬張るコウにつられて、希羅もスプーンを掴み、口に運んだ。バターの香りがふわりと広がる。

「ね、キラ、美味し?」

「…ん、美味しい」

コウの期待に満ちた瞳に遠慮することなく、希羅は素直に答えていた。嚙下した後口内に残るハーブの香りも、わざとらしくなく、上品に消えていく。

「すごく、美味しいよ」

コウは希羅の一言を聞いて、安心したように顔を綻ばせると、夢中で頬張り始めた。

「うーん、最高っ」

一段とキラキラするような、笑顔を振りまいて、コウが呟く。美味しいものを食べてほっぺたに手を当てるなんて、全世界中で君しかしないと思うよ。希羅は苦笑しつつ、曖昧に合いの手を入れる。

「ほっぺた落ちちゃうよ」

全く、そんな笑顔を見せられたら、女でも男でも落ちちゃうんだろうなあ。何だか悟ったような気分になりつつあったが、希羅はと

りあえずピラフに集中することにした。

夢中でピラフを頬張るっているうち、香水の香りが鼻をくすぐり、希羅は顔をあげた。

いつの間にかコウの横に女性が座っていた。切れ長の目に、赤い唇。顔立ちを魅き立たせるようなメイク。目に鮮やかな真っ赤な色のワンピースを着ている。柔らかに巻かれた髪は、ポニーテールに纏められ、前に流されていた。

キレイな女性^{ヒト}だった。

「コウちゃん、久しぶり」

長い睫毛を伏せ、その女性はコウの頭をなでた。そして、彼の金髪を細い指先に絡める。その指遣いはまさに：なんというか：官能的、という言葉がぴったりだった。希羅は思わず目を逸した。

「ずっと来てくれなかったじゃない」

「だって、お金なかったんだもの」

髪をいじくる女の人を気にする素振りもなく、コウはピラフを運ぶペースを変えずに答えた。

「全く：。今日だっておごるわよって言ったから来たんでしょ」

「そう」

悪びれずにへへと笑うコウの頭を軽く小突く。

「ま、もう一人分おごってっていうのも、いいけどさ」

「でしょ、明里さん」

「も、コウちゃんたら、いつもマスターって呼びなさいっていつてるじゃない」

「：マスター？！」

思わず声を上げてしまった希羅に、二人の視線が集まる。

「あ、す、すみません」

なにか？とでも言いたげにマスターに首を傾げられ、慌てて謝る。それにしても、落ち着いたこの店には不必要なくらいな色気を持

つてるんだな、と希羅は思った。

「もう、お友達だっていうから了承したのに…」

はぁ、と艶やかに息を吐くと、コウの頬をつつく。

「コウちゃん、いつの間に彼女なんて作っちゃったのよ、もう」

「へ？」

いつの間にか、希羅はマスターに睨まれていた。

U n L u c k y ? 勘違い (前書き)

中途半端な終わり方の前回から凄まじい程のサボり期間でしたが、
また投稿を再開したいと思います。頑張ります!!

Unlucky?勘違い

「なーんだ、ほんとにお友達だったのね」

「：はい」

尋常じゃないほどのマスターの圧力を感じ、慌てて希羅は三日前に始めてであったこと、今日も偶然出会い、先日ご馳走したお礼を唐突に申し込まれたこと。コウに対して特別な感情はないということとを強調して説明すると、マスターはようやく誤解を解いてくれた。「私は明里、この店長をしてるわ。マスターって呼んでね？明里さんっていうのはコウ君限定だから」

色気たっぷりウインクをプレゼントされ、希羅は苦笑いした。

「大人気なくてごめんなさいね、私勘違いしちゃって」

マスターは前身を乗り出し、唇を希羅の耳元に近づけ続けた。

「：ライバルかもって」

何を返していいのかわからなかった希羅はとりあえず無難に愛想笑いを返しておいた。

予想通りというかいつもの如く、元凶であるコウは二人のやり取りにも気づかずに暢気にクリームソーダを啜っていた。もちろん、マスターのおごり（という名の餌付け）である。

「美味しー」

残った氷までほお張って満面の笑みを浮かべるコウに、マスターは頬を緩めた。

「ほんとにこの子は小悪魔よねえ、下手な女なんて適わないくらい」

「小悪魔って何？」

きよとんとするコウの頭を撫でて、マスターはおかわりいる？と尋ねた。

「うん、いるっ！」

即答したコウに微笑んで、希羅に「だからうちはいつも経営が危ういのよ」と耳打ちし、マスターは厨房に引っ込んだ。

「ふう…満腹」

希羅は空になった皿にスプーンを置き、満足そうに頬杖をついた。ピラフはマスターに対応している間に少し冷たくなってしまっていたが、冷えても美味しかった。彼女の料理の腕は見かけによらず確かなようだ。

コウも空になったグラスを脇にのけ、机につっぷしている。コウのためのソーダをつくり終え、買出しに出かけたマスターに留守番を頼まれてから十分ほど立っていた。

「お腹いっぱいになったら、眠くなっちゃったよお」

不意に顔をあげると、コウは大きな欠伸をした。その後も手を当てるポンポンと叩く。

「うん…そだね」

を、窓から差す光がコウの金髪をちらちらと照らしているのをぼんやりと眺めながら、希羅はどうして 男の癖に自分よりも数百倍は可愛らしいそんな仕草が出来るのだろうと考えていた。

その時、からんからんと心地よいアンティークベルの音が響いた。扉の上部に付けられて来客を知らせる音に二人が揃って扉を振り向くと、店の入り口に怪しげな男が立っていた。

容貌から異様であった。髪はもじゃもじゃ、Tシャツはよれよれで襟元も形を保っておらず、本来の黄色はお情け程度に残っているだけである。ズボンもすっかり裾が保つれ、ダメージジーンズというのには余りにもお粗末なものだった。しかしそんなうらびれた格好以上に、男の身に纏っている雰囲気は異様だった。

店内を包んでいた静寂を破ったのは、彼が発した言葉だった。

「マスターは？」

「うん、買い物に行ったよ」

え、今までの描写は何だったのと悲しくなるような勢いでコウは驚く様子も見せなずに屈託なく答えた。そんなコウの答えを聞き、彼はひよろ長い腕でボサボサの頭を欠いた。白いものが大量に落ち

ていくような気がしたが、希羅は無視することに決めた。

「ちっ…あいつ逃げたな」

「うん、遅くなるって言ってた」

「…まあいいや、待つか」

男はどすどすと足を踏み鳴らして店に入りこむと、手近な椅子を乱暴に引っ張り腰掛けた。

そして再び店内を静寂が包む。

「ねえ、コウ、知り合い？」

声のトーンを落としても狭い店内の中では男に聞かれる危険は排しきれない。だがどうしても気になって仕方が無く、希羅はコウに尋ねてみた。

だが配慮もへったくれもないコウである。希羅がかもしだした内緒話の雰囲気をまるで無視して答えた。

「ん、えーっと…知り合いっていうか、よく此処に来るよ」

そして希羅の止める間もなくコウは自然の流れの如く男に話題を振った。

「ね、そうだよね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3917m/>

幸か不幸か

2011年8月17日03時33分発行